

# 3 宿場回廊めぐり



## おすすめコース



## ワンポイント

コース内に「宿場回廊説明サイン」が13箇所設置してあります。(詳しくは13ページをご覧ください。)

ご希望の方には、宿場回廊ガイドを行っています。

下記までお問い合わせください。

滑川市観光協会  
滑川市中川原410  
(ほたるいかミュージアム内)  
TEL(076)476-9200

## 見どころ

加賀藩の宿場町として人の往来や物資の流通で賑わったところ。いにしへの宿場町を回廊として見て回り、しばし足を止め、今に残る歴史の息遣いを感じ、過去と未来に思いを寄せていただけたら幸いです。

## おすすめ

### ◆宿場回廊の芭蕉句碑

4 櫛原神社境内 「しばらくは花のうへなる月夜かな」

12 徳城寺境内 「早稲の香やわけ入右はありそ海」

### ◆宿場回廊の主な国登録有形文化財

#### 8 廣野家住宅主屋

大正3年(1914)に深井省吾という株屋が滑川の宮堂大工・岩城庄之丈に建築を依頼したもので、木造2階建、入母屋造、妻入り、町家風の繊細な出格子を持つが、間取りは自由な数寄屋風の書院造で、部分的に寺社建築に用いられる技法も見られ、特徴的な外観になっています。



#### 9 旧宮崎酒造

もともとは売薬で財をなして酒造業を営んだ小泉屋の建物で、江戸時代後期からは養照寺と交代で本陣も務め、宮崎家が明治前期に小泉屋から土地と建物を購入し、酒造業を営みました。

戦後に改編された外観を往時の姿へ復元し、平成22年、店舗兼住宅・酒蔵・麹蔵・衣装蔵の4棟が登録有形文化財に登録されました。



#### 9 城戸家住宅主屋

城戸家は19世紀前半に瀬羽町へ移り住み、味噌・醤油の製造小売り、金物類の小売りや貸鍋などを生業とし、出身地にちなみ神田(じんでん)屋という屋号を使用。慶応2年(1866)の大火によって焼失したため、この建物は明治初年頃に再建され、木造2階建、屋根は切妻、棧瓦葺で、1階前面に板敷で作りつけの帳場を持つなど当時のミセ構えを良く残しています。



#### 6 小沢家住宅店蔵

明治後期に建てられたもので、総2階建、屋根は切妻・棧瓦葺、黒漆喰で塗られた壁に観音開扉を持つ重厚な土蔵造りで、棟の剣形雪割瓦、正面の起(むく)り屋根の下屋といった地方色も見られます。小沢家は荒町で呉服商を営んでいました。



## のる my car 時刻表 (滑川市コミュニティバス)

H27.6.1 改正

### 市街地循環ルート

乗り場	2便	3便	4便
滑川駅前	10:30	13:20	15:50
ほたるいかミュージアム前	10:35	13:25	15:55
橋場	10:38	13:28	15:58

### 小森・蓑輪・大日室山・北部循環ルート

滑川駅前→約3分(北部循環ルートは約6分)→市役所前 滑川駅前発時刻

小森ルート	08:50	11:35	—	14:00	16:50
蓑輪ルート	08:50	11:40	—	14:10	16:45
大日室山ルート	08:55	11:45	—	14:15	16:45
北部循環ルート	—	11:01	13:46	—	16:21

### 小森・大日室山・栗山・蓑輪・市街地循環・寺町ルート

市役所前→約6分→滑川駅前 市役所前発時刻

小森ルート	10:03	—	12:48	—	—	15:13	—	—	18:03
大日室山ルート	10:00	—	12:50	—	—	15:20	—	17:50	—
栗山ルート	10:03	—	12:43	—	—	15:23	—	—	18:03
蓑輪ルート	10:12	—	—	13:02	—	15:32	—	—	18:07
市街地循環ルート	10:59	—	—	13:49	—	—	—	16:19	—
寺町ルート	—	11:28	—	—	14:08	—	—	16:48	—

#### 1 北陸街道「滑川宿(なめりかわじゅく)みちしるべ」

平安期頃、今の市域辺りに「堀江荘」という京都八坂社の荘園がありました。文治2年に八坂社の六月会の費用を負担する料所として「梅沢・小泉・滑河」が指定されました。これが滑川の地名の初見です。

#### 2 和田の浜「二大奇観とネブタ流し」

かつて白浜青松の海岸だった和田の浜は、戦国時代の古戦場でした。この浜で毎年7月31日に行われる無病息災を願う「ネブタ流し」は、国の重要無形民俗文化財に指定されています。

#### 3 常盤町と町域の拡大

滑川宿東端の神明町に連続して東に拡大したこの地域は、天保期に「新屋敷」と呼ばれました。万延元年に称永寺が現在地に移り、参道周辺に茶屋街が立ち並び、明治時代に常盤町と改められました。

#### 4 櫛原神社(いちばらじんじや)と神明町

櫛原神社は、江戸時代に柳原村からこの地に遷されました。境内には、松尾芭蕉の句碑が建立されています。天明3年の「滑川惣絵図」には「神明社」と記されており、この社地に成立したのが神明町です。

#### 5 鍛冶屋橋と中町

江戸時代初期頃、神明町と中町の境界を成す大町川が街道を横切るあたりに鍛冶屋が置かれました。東側には、御蔵所があったため川に橋が架けられ鍛冶屋橋と呼ばれました。

#### 6 芭蕉「奥の細道」と川瀬屋

松尾芭蕉と同行の河合曾良が「奥の細道」の旅において、元禄2年7月13日(新暦8月27日)の夕方に滑川に着いて宿をとったのが、旅籠「川瀬屋」と云われています。

#### 7 桐沢本陣と大町

大町は滑川発祥の町で、文治2年京都八坂社の荘園である堀江荘にあった「滑河村」は、ここに成立した村落であったと考えられています。慶長20年加賀藩によって北陸街道の宿場町として再編されました。

#### 8 橋場

北陸街道の中心部を流れる中川河口で町の東西を結ぶ橋の左岸を橋場といいます。藩政時代には、河口の船着き場で年貢米が積み出されるなど、周辺地域の物資の集積地として賑わいました。

#### 9 瀬羽町(せわまち)と信仰の道

橋場から西側の狭町(瀬羽町)は、文化10年には251軒の商売屋があり、商家が集まった町でした。町外れには街道から立山へと続く登拝道があり、道標が残っています。

#### 10 晒屋(さらしや)

新川木綿の生産がされ、綿屋・木綿の商売・染物屋で賑わっていた江戸時代に、町の中央を流れる中川の清流で綿布や麻布を川面にさらす「晒屋」がいたことから由来しています。

#### 11 くすりのまち滑川

享保18年、高月村の高田千右衛門が富山の薬種商松井屋源右衛門から「反魂丹」の製法を習い、反魂丹屋千右衛門と名乗り製造販売したので始まりとされます。

#### 12 四間町(しけんちょう)と徳城寺

四間町は享和年間、人家が4軒あったことに由来します。徳城寺は、明治13年に現在地に移転してきました。境内には、明和元年に芭蕉70回忌に翁を顕彰するために建立された有磯塚があります。

#### 13 吾妻町

加賀藩の東の御蔵があったことから、東町と名付けられ、のちに吾妻町と改められました。江戸期には、滑川町東御蔵所は御台所と呼ばれ、6棟21倉の米蔵がありました。

